

TAKE FREE

ちよつと空まで、
雲取山へ。

Mt.Kumotori-To The Sky



BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine

奥多摩町公式タブロイド

#12
Twelfth ISSUE



Photo/Yasuyuki Takagi

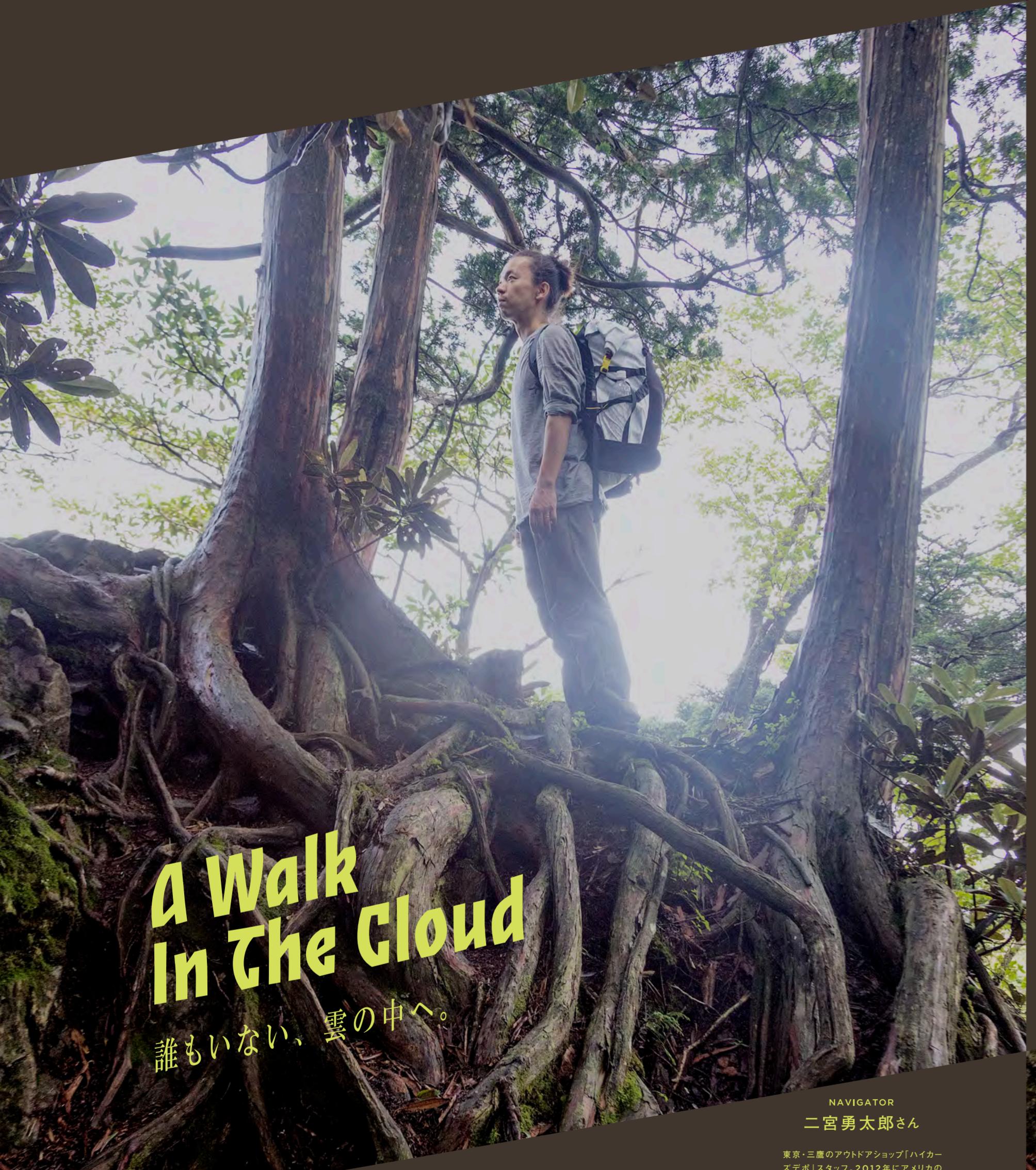
A Walk In The Cloud

誰もいない、雲の中へ。

NAVIGATOR
二宮勇太郎さん

東京・三鷹のアウトドアショップ「ハイカーズデポ」スタッフ。2012年にアメリカのPCT(パシフィック・クリスト・トレイル)を約半年かけて踏破。以来、ハンモックを持参する登山にめりこむ。近日中にハンモック登山の書籍を出版予定。
<https://hikersdepot.jp>

03



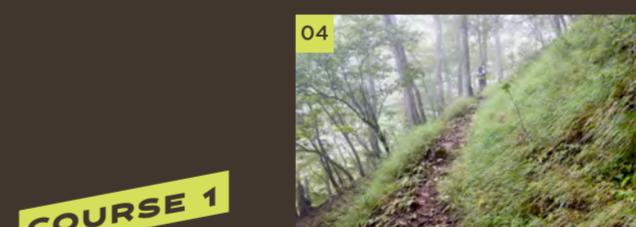
Boundary Line

歩いて、歩いて。
亜高山帯との境目を
はっきりと感じながら。

03

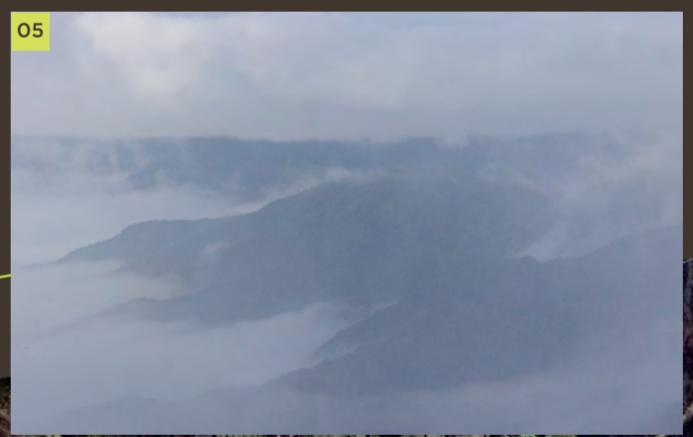


04



COURSE 1
東日原バス停～
一杯水避難小屋～
ミツドッケ～
大栗山～
七跳山～
坊主山～
酉谷山

05



01



02



06



04

雲取山に登る際、奥多摩駅からバスで約40分の鶴沢バス停を経て登山道に入るルートが最も一般的。鶴沢には駐車場もあって、車を駐車してすぐ登山口へたどり着けるのも人気の要因だ。ここから七ツ石小屋、ブナ坂、奥多摩小屋跡、小雲取山、山頂へと連なる道はほどよく整備され、急坂はあれど、気持ちよい眺望を楽しめる片道5～6時間ほどのルートとなる。今回はそんな人気ルートを避け、ユニークな雲取の表情を確かめにちょっと変わったコース設定に挑んだ。ナビゲーターは東京・三鷹のアウトドアショップ「ハイカーズデポ」スタッフの二宮勇太郎さん。アメリカの人気トレイルであるPCT(約4300km)を5ヶ月かけて歩くなど、多彩なトレッキングの経験を持つ二宮さん。ハンモックの楽しさ、心地よさに取り憑かれ、自然の中へ入る時は常にハンモックを持参。そんな彼にルートを決めてもらい、僕らは雲取を気ままに歩くことにした。

二宮さんが選んだスタート地点は、奥多摩駅からバスで30分、東日原バス停付近の登山口。ここから一杯水避難小屋、大栗山、坊主山へと登っていくルートだ。

「僕は人のない大自然の中を歩くのが好き。このルートだと誰にも会わずに登り続けられる可能性が高い。気持ちよく登山道を歩くっていうのももちろんいいけど、自分で山頂へ到達するという感覚を味わいたいというのもあって、ここから登つてみよう。」

小雨が降るなか登山をスタート。もともと見晴らしがさほど良くない登り始めのコースということもあって、ひたすら登るという時間が2時間ほども続く。雨が強くなってきたので、小休止のため早速、ハンモックの準備。登山道からちょっと外れたこの場所は二宮さんのお気に入りハンモックスポットだ。

「この場所、地図ではニホンザル生息地と書かれているんです。やっぱりサルたちは気持ちのいい場所を知っているんですね」

天気が良ければ木漏れ日をほどよく感じられる南側の斜面。大木が雨をさえぎってくれるので、ハンモックに揺られながら心地よく森の時間を楽しめる。霧に包まれる森が幻想的、人の気配は全くない。

再び歩きはじめ、一杯水避難小屋を経て、いよいよ長沢背稜に入る。この稜線は雲取通には人気の高いルート。稜線に入るといきなり周囲の雰囲気が変わり、同時に歩くスピードが自然と早まっていく。

「小屋まではヨコズヌ尾根というルートを歩いていたんですが、周囲はヒギやヒノキの植林ばかりでしかも斜面が結構きつい。この急斜面は奥多摩の山の特徴ですね。だけど、長沢背稜に入ると斜面は緩やかになると同時に、いつの間にか周囲はブナやナラの広葉樹林になっていく。この、ガラっと雰囲気が変わるのが好きなんですね。そして散歩道のような緩やかな斜面。植生の変化をはつきりと体感でき、静かな森歩きも楽しめる」

「このルートはまるで異なる神秘的なマート。誰一人、周囲を歩く人はいない。僕らは快調に霧の中を黙々と進んでいった。」

雲取山に登る動機は人それぞれ。ここでは雲取山を愛する二人のアウトドアマンに、この山と自身の関係や雲取に登る価値について話を聞いていく。

KUMOTORI LOVERS

雲取山は、自然と自分を 定点観測できる場所

雲取山が大好きで、僕は30年くらいの間に都合100回程度、登っているかも。最大の魅力は定点観測できる山であるということかな。前提として七ツ石小屋や雲取山荘などが通常営業してくれているおかげで僕らは一年中、いつでも登れるということがまず大きい。だからこそ季節を変えて行くと違った雲取の表情に出会えるわけで、定点観測の面白さが味わえる。また、雲取は決して簡単に登れる山ではないということも、実は多くの人にとって魅力となる。あまり山に慣れていない人は小屋を利用する事でまずは雲取に登るという目的を達成することができ、体力や技術が伴ってくれば登り甲斐のある雲取で自分の力量を確かめることができ、つまり登山者としての自分を定点観測できる山でもあるということになる。もちろん自然観察という側面でも雲取は高い。僕は特に秩父側に魅力を感じていて、広葉樹林が見られる山なのに、西へ向かうに従って針葉樹が濃くなっていく。この原生針葉樹林はコメツガやトウヒなどである時、こうした山並みの植生はシベリアと似たものであると聞かされた。それ以來、雲取の山頂に立って西方の山並みを眺めると、極北のシベリアにつながっているように思え、この山の見方が僕の中で大きく変わった。感覚としては針葉樹の森がブリッピング、大きく、深く見えるようになった感じ。僕は、人が生きるべき世界と今、自分が身を置く場所の距離感、隔絶感を求めて山や洞窟に向かうという行為をもう何年も続けている。誰もいない場所へ自力で到達すると「自分は生きている」という感覚があらわになるとか、人としての輪郭がはっきりする。雲取は僕にとってそんな感覚を味わえる山でもあるし、東京でながらシベリアに通じる自然を感じることもできる、貴重な場所なんだ。

ボクの好きなコース設定

秩父湖→二軒尾根→和名倉山→将監(しょうげん)峠→主稜線→雲取山山頂→芋ノ木ドッケ→長沢背稜→奥多摩ヘ下山(トータル2泊~4泊)
※秩父湖から将監峠まで一気に歩くにはガツツリ歩く必要あり。長沢背稜をクライマックスとした、できるだけ人と会わないで隔絶感を楽しむコース設定

登山を通じて、 人と山とのつながりを感じる

もう20年以上、山登りの魅力に取り憑かれていてなかでも奥多摩の山々、特に雲取山は思い入れの深い山場所。様々な国内の山々、マレーシア、アイスランドなどの外国の山の経験もあるけど、ある時に、行きたい山を挙げるときがないのと、アルプスの山に行く時間とお金があれば奥多摩に2、3回行けるなんてことを思つことがきっかけで、ひたすら奥多摩の山を歩くようになつた。そうすると、同じ山に季節を変えて、年をまたいで通い、知識と経験が積み重なっていくことで自分の登山が豊かになる感覚がとても楽しく感じた。子どもの頃の川井でのキャンプや遠足で歩いた丘陵地などの原体験が今につながり、懐かしさを感じる特別な山。勝手ながらホームの山城と言つようにもなつた。雲取山の標高は2017m。東京にこれほど高い場所はどこにしかなく、コメツガやシラビソといった針葉樹の森も東京にはここしかない。冬には-10℃を下回り、雪も多いと1~2mくらいかそれ以上。このような厳しい気候にも耐えられる針葉樹で森ができる。またこのあたりの山々はピークごとに違う岩石でできている、これを読み解いていくと日本列島の成り立ちを垣間見ることにつながる。一方で人の生活と密接な山であったことも大きな魅力。古から山に人が入り、生活のために利用していた痕跡がいたるところで見られる。燃料のための薪炭炉や藪葺屋根のための茅畠、わさび田、林業などなど、これもまたキリがないほど、エピソードがあるのだ。雲取山をはじめ奥多摩の山ととの関わり、自然環境など、書物や資料をもとに登山をするところを楽しみに深みが増す。現代において人と山との理想的な関わりを考察し、実践することが僕にとって大きなテーマ。雲取はそんなことを存分に楽しめる場所なのだ。

ボクの好きなコース設定

奥多摩→日原街道→富田新道→小雲取山→雲取山山頂→長沢背稜→奥多摩ヘ下山(1~2泊でやや急ぎ目)※雲取山荘の主人である新井信太郎さんが整備した富田新道で広い尾根、手つかずの自然林を堪能。ここでしか味わえない無垢の雲取に出会えるコース設定

誰でも行ける
山じゃ、ない!



PROFILE
土屋智哉さん

東京三鷹のアウトドアショップ「ハイカーズデポ」店主。アウトドアをウルトラライト(超軽量)で楽しむスタイルを日本に啓蒙した第一人者。地底湖へのケーブルダイビングやロングディスタンスハイク(長距離移動)などハードコアなアクティビティにも精通。

雲取の美しさを
守ろう

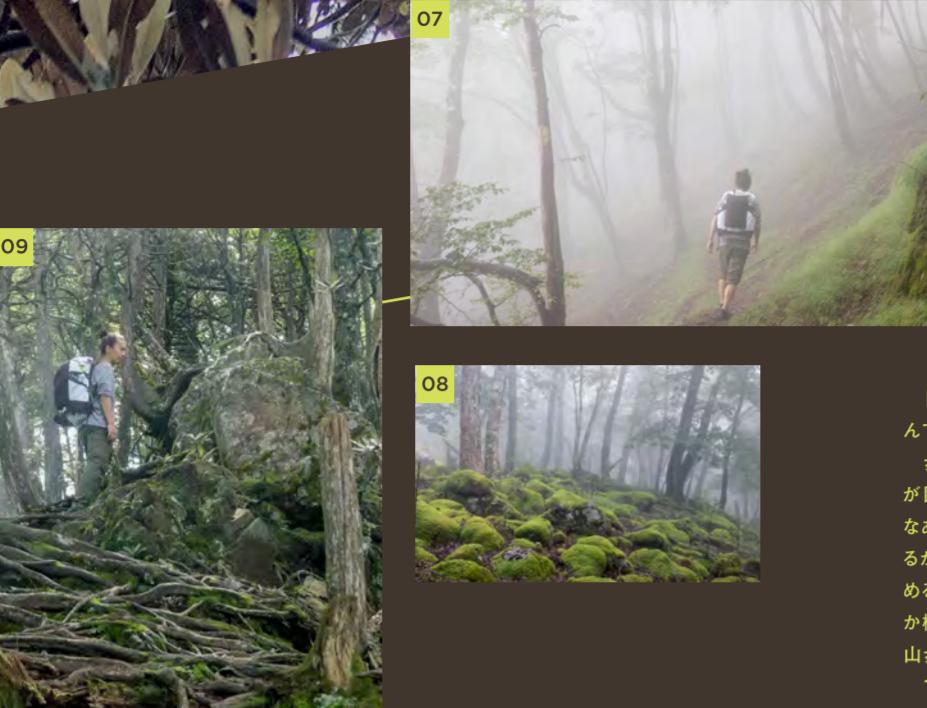


PROFILE
林章弘さん

バタゴニア東京・吉祥寺スタッフ。かつてはあきる野の小熊ビジャーセンターで自然解説員を務めた経験を持つ。2020年7月、秩父甲斐多摩ナショナルパークリアルアソニエーション発足に尽力。奥多摩を始めとした国立公園内の山の魅力発信に注力する。

COURSE 2

西谷山～
タワ尾根～
水松山～
長沢山～
芋ノ木ドッケ～
雲取山頂～
小雲取山～
七ツ石山～
日陰名栗山～
鷹ノ巣山～
峰谷バス停



「長沢背稜を歩いていると森の奥深くへ突き進んでいく感じがいいですね」

歩けば歩くほど、踏みしめる地面には巨木の根が目につく。岩稜帯の上に、複雑に絡み合うようなあなたの根はこの山のエネルギーを表現しているかのようにも思える。いつの間にか「土を踏みしめる」というより、「根を歩く」といった感覚。なんだか樹木に申し訳ない気持ちもあらながら不思議な山歩きを僕らは楽しんだ。

1泊した後は6時間超をかけて一気に雲取山頂を目指す。水松山、長沢山、芋の木ドッケと歩くにつれ、苔むした山道が目につくなる。登り始めの風景とは全く異なる一面、緑の苔の世界。森の奥深くに入つたなという実感を抱えながら歩を進めていく。「昨日歩いたブナやナラの広葉樹林とはうってかわって、そぞろ並高山帯の針葉樹林に入ったなという境目をまた感じます。シラビソ、トウヒ、そして名物のアズマシャクナゲ。そうそう、僕は雲取でダケカンバを見ると結構、標高が高い所まで来たなと身体で理解するんです」

途中、気持ちの良さそうな場所を探しては、何度もハンモック休憩。天気も少し良くなってきて、森の奥深くで静かなハンモックタイムを満喫する。「アメリカのロングトレイルを歩いている時に気づいたのは、人の数だけ楽しみ方があるんだということ。小さな女の子から80歳過ぎたくらいのご老人まで、本当に多様な人たちが思い思いのスピードで、思い思いのスタイルでトレイルを楽しんでいる。その時、ハンモックを上手に利用して山歩きをしているハイカーが結構、多いと感じて自分もやってみようと思うようになったんです。ハンモックにも色々種類があって、僕の場合はおよそ20種類くらい持っていて、どんな楽しみ方をするかでどのハンモックを持参するか決めるんです。僕は斜面にテントを張ると落ち着かなくて。ハンモックなら斜面を気にせずにいい木を探せばいいだけ。ハンモックと寝袋を組み合わせると本当に気持ちいいんです。あんまり気持ちよすぎて何時間も山の中で寝ちゃうことがあるくらい。ハンモックを楽しむために山へ行くなんてこも結構多いんです」

そんな優雅なハンモックタイムを挟みつつ、いよいよ山頂への道筋が見えてきた。これまで深い森の中を歩いていたのとは正反対に、開放感たっぷりの山道を頂上まで突き進む。

「やっぱり2000mオーバーの山は迫力がありますよね。本当に雲にも手が届きそうだし、ここまで眺望を楽しむコースではなかった分、山頂付近の風景はよりダイナミックに感じます」

雲取山荘で一泊した後は一気に下山。山頂へと向かう多くの登山客とすれ違いながら、僕らが辿った登りルートとの雰囲気の違いにあらためて驚く。「登りルートでは派手な眺望がない分、森の中で過ごす、歩くということに集中できた。下山時のノーマルルートを歩いていくと、同じ山でもこんなにムードが違うんだって誰でも気づくと思う。ルートを変えれば何度も新鮮な楽しみが待ってる。それが雲取ですよね。しかもこんなに深い森が東京にあるという事実。確かに彼方の山奥に入った感覚を1泊とか2泊で味わえるのもまたいい」

終始、雨や霧に見舞われたがおかげで幻想的な森のムードを存分に味わうことができた。高度を変えるにつれ、驚くほどの自然の変化も目の当たりにすることができた。さて、次に登る時はどんなルートで山頂を目指そうか? 選べるルートはまだ多彩だ。

no man's trail

雲の上へ。
「自分」を確かめられる
場所に向かう。



7&8&9:針葉樹から広葉樹、苔むした岩稜帯、巨木の根で覆われた斜面など、標高に応じて次々と変化する環境 10:2017mの山頂に到達 11&12:下山の途中でもハンモックや川辺しばしばリラックススタイルを楽しむ。急がずゆっくり歩を進め、興味の赴くまま寄り道するのが二宮さんの山歩きスタイル



山岳写真家・三宅岳が雲取へ 山小屋を愉しむ。

雲取山で「出会い」と「憩い」を求め、名物小屋巡りを。
3つの小屋に向かったのは山岳写真家の三宅岳。
小屋を巡り巡って、雲取の魅力をあらためて感じるトリップへ。



PROFILE
三宅岳

山岳写真家。東京農工大学環境保護学科卒業後、山岳写真家の道を歩み始め、自然、人、生き物の輝きを撮影し続ける。著書に「山に生きる失われゆく山暮らし、山仕事をの記録」(山と渓谷社)、「炭焼紀行」(創森社)、「槍ヶ岳・穂高岳」調査執筆(昭文社)などがある。



標高 1597m の名物小屋

七ツ石小屋

鶴沢ルート中腹の標高1597mに位置する素泊まりの小屋。小屋は6名限定で1泊4000円(食事なし)、テント泊は20名限定で1泊1000円(1名)。バイオトイレ、天然湧水の引水あり。予約電話090-8815-1597(受付時間AM9:00-PM3:00)

小屋の主と、 至福の時間を過ごすために

「この小屋でなかつたら、小屋番をやろうとは思わなかつた」

シトント雨に包まれ、星のかけらも見えない夜。主の藤本多美子さんは、唯み縫める口調でこう語った。道中には、朽ちかけた家、石垣、炭焼窯、石仏や祠。里人旅人が行き来した数多の痕跡を確かめながら歩く。そして、「平将門迷走ルート」なる案内板が。かつて、その身を追われた平将門がここに逃げ延びてきたというのだ。そこに記される荒唐無稽な話も、山行の妙味となる。

やがて小体な小屋の前となる。「七ツ石小屋」だ。何の変哲もない山の中腹、小さな平地ぎりぎりに建てた風情。可愛らしさは群を抜く。この小屋を守るのが多美子さんである。学生時代、登山サークルに入り「雲取山がホームグラウンド」と、多美子さん。雲取山を四季折々に行き来したとはいえ、宿泊もテント利用であったという。運命を変えたのは東日本大震災。ボランティアとして活動。そこで、ともに暮らし働くようになる堀さんと出会った。その堀さんが東京に訪れた折り、都民として最高峰を案内したいと思い、雲取山へ。本人曰く「七ツ石小屋なんてあったっけ」といつも素通りの小屋裏に天幕を張り、一夜の宿とした。

ところで、この小屋。そもそもはかつての東京府が水源林管理のため建てたもの。初代小屋主は崎崎市氏。彼亡き後は常連さんが週末営業を引き継ぐなど幾人もが小屋番として関わっていた。多美子さんもテント泊利用をきっかけに、小屋番の一人となつた。この小屋は食事提供がなく、それは小屋番の仕事量をずいぶん軽くしていた。一方、客と膝を交え対話する余裕があった。そこが魅力で引き込まれた。

やがて堀さんの都合で富山に転居。高速バスで上京。数日を小屋で過ごすというスタイルが出来上がった。あまり定職が続かない堀さんだが、林業経験もありチェンソーを扱えた。薪が必要な小屋では不可欠なスキルだ。こうして小屋番へのバックグラウンドが固まつた。小山屋を知らうと北アルプスの大きな小屋で二人働いたこともあったが、小さな小屋でなければ働きない性格だと自らを悟る経験になつただけであった。こうして、今や誰もが認める七ツ石小屋の主となつた多美子さんと堀さん。常連さんを交えて、深い夜の底まで話は尽きることがなかった。

1:わずかな平地にしがみつく。霧の七ツ石小屋
2:マルバダケブキ・落葉松・青空。充実の後線
3:長い夜。燈火一つで農潤な時間となる
4:常連のお客さんを見送る。霧けぶる小屋の朝
5:定員6名が物語る小さな客室。これぞ山小屋
6:入口を開ければ、すぐに七ツ石小屋ワールドだ
7:揺れる杯に満ちる至福。主の藤本多美子さん



働き者たちが整える、極楽の宿へ

「これでいいのだ、ですよ」

先ほどまで、丹精に石を積んでいた男の穏やかな語りが、スッとして込む。祖父、父の後を継ぎ、20代から小屋に入った木下浩一さん。還暦を過ぎた今も、三条の湯の主人として、昨日も今日もそして明日も、小屋の日常を支えている。

お祭バス停の「雲取山・飛竜山登山口」看板を右に、後山川沿いの林道へ歩を進める。2時間半ほど歩いた頃、車道は終わり、原生林の渓谷はさらに美しさを増す。沢沿いの山道を30分ほど登ると、見上げる山肌にねりつくような、三条の湯の建物が姿を現す。

駆けつけ一浴。小風呂は三人ほどでちょうど良い大きさ。たっぷりの湯はほのかに硫黄の香り、とろろの湯加減。沁みる。

さて、小屋からすぐの登山道で三人の男が働いていた。

路肩の木が下に落ち、道を支える石積みを崩したそうだ。この急崖に身を乗り出した場所で指示を出し、石を重ね、組み、指示を出し、体を動かし働き続けているのが小屋主の木下浩一さん。床掘りを整えるのが大変」とのこと。どうやら、床掘りとは最初に石を置く場所を掘ることらしい。

その仕事ぶりにほれぼれてシャッターを切り続けた。浩一さんの人柄が見える。それほど見事な手仕事だ。この自活の精神が小屋のすべてに行き渡っている。水力発電、製材した木で作られたテーブル、手製の木皿、食卓を彩る野菜。浩一さんは、循環という語に思いを込めた。もちろん、出来ないこともいろいろある。しかし、やることはやってきた。その当たり前の小屋暮らしに、「これでいいのだ」と自ら念を押す。この人の小屋に泊まれることは、思いがけない幸せであった。

1:九十九折れで三条の湯へ 2:名湯の湯けむりにもゆれる緑。ゆらりゆらり 3:至福の一服。石積み仕事を終えた木下浩一さん

日帰りではもったいない

三条の湯

国道411号線のお祭から徒歩3時間、標高1103mに位置し、70年以上も前から温泉のある山小屋として愛され続ける。宿泊定員30名、テント泊定員20名。1泊2食付き9000円/素泊まり6300円。テント泊1人1000円。いずれも要予約。大小2つの浴場があり立ち寄り入浴も可能。

www.tabata-kan.co.jp 0428-88-0616/連絡所電話

山頂にて、満点の星空を想像しながら

鉄板を張り合わせてつくった豪放なストーブ。揺れる炎もまた巨大。ストーブに向かう体前面はどこまでも暖かく、一方、背中側は寄せる寒氣にぶるぶる凍えていた。翌朝、チエンソーや材から仕上げた臼で、餅つきがあった。美味かったはずだが、記憶にない。

今から何十年も前。雲取山荘で迎えた正月景色の断片である。

三条の湯からは、いかにも水源林の巡回路という道のり。山腹トラバースや崩壊地の高巻を繰り返し少しずつ主稜線へと近づく。やがて落葉松林を抜けると主稜線の三条ダムミ。さらにひと踏ん張りの急登を終れば、東京都最高峰の山頂だ。ここにも避難小屋が建つ。

一等三角点の山頂だけに大展望のはずだが、ど

うも雲の立ち上がりが早く、展望今ひとつは残念至極。

一旦、三峰方面へと下り、雲取山荘に足を伸ばす。この界隈で最大の小屋だ。冒頭の年越しの思い出もこの小屋のものだが、建て替え前の古い小屋であり、現在は格好良いログハウス調で、豪快な薪ストーブは過去の話である。

人気の山小屋ではあるがこの日は登山者の姿もない。小屋の留守をされている方に伺ったら、オーナーさんも下山中のこと。残念。

帰路は小屋前から巻き道を利用し、小雲取経由で。豪雨落雷に襲われたが、七ツ石小屋近くでのこと。暫く雨宿りをさせていただいてからの夕刻下山となった。



昭和3年設立の歴史を感じて

雲取山荘

標高1891mに位置する雲取山頂近くの名物小屋。木造2階建、収容人数は200名(コロナのため人数制限あり)。1泊2食付き大人9500円/素泊まり6800円。テント泊1名1500円。予約電話0494-23-3338(AM9:00-PM8:00頃)



緊急トピックス!

奥多摩小屋跡地利用について

かつて、標高1750mの地点に存在していた奥多摩町が管理する奥多摩小屋は平成31年に施設の老朽化で閉鎖となり解体された。しかしその跡地利用として、土地の所有者である東京都が野営場の整備に向け、

現在検討を進めている。雲取山フリークにとって奥多摩小屋は貴重な存在だった。また再び、あの地点が野営場として利用できる日を心待ちにしたい。

山岳救助のエキスパートに聞く

安全登山の心得

近年、登山者が増えているという雲取山。楽しく、そして、安全に。

雲取山登山を実現するために必要な心得と準備について、

山岳救助のエキスパートに話を聞いた。

たとえば、コロナ禍でアウトドアブームがより加熱したこと。漫画『鬼滅の刃』の人気キャラクターの出身地として話題になったこと…などなど。いくつかの理由が挙げられるが、近年、雲取山の登山者が増えているという。そうしたなか、軽視できないのが山岳事故のリスクだ。

元・警視庁青梅警察署山岳救助隊の佐藤さんに、雲取山での事故の傾向について伺ってみた。「まず、山岳救助活動のなかでも、全国的に多いのが“道迷い”ですが、奥多摩の山々は道迷いのリスクが高いのが特徴です。人々の暮らしと密接に関わってきた山々なので、登山道以外にも作業道が結構あるためです。雲取山周辺にも、水源林の巡回路があるなど作業道は多い。通常は道標を見ればわかりますが、あたりが暗くなつて、気づかずには迷い込んでしまうケースもあります。富士山には登れるという人でも、雲取山で迷うことは十分にあります」

雲取山は、たとえばロープを使わないといけないとか、滑落リスクの高いルートがあるとか、特別な登山技術を必要とするような難易度の高い山ではない。ただし、山が深く、急峻な山道が続くロングコースになるため、十分な体力は必要だ。そうした特徴から、とりわけ事故が多いのは、登山口近くの通り道なのだと思います。「雲取山を往復しようと思うと、健脚でも8時間ほどかかる。たとえば、それを日帰りでやろうとして、疲れがMAXに達したときに、登山口まで本当にあと少しのところでバランスを崩したり、落ち葉で足を滑らせたりしてしまうケースが多いようです。『登りの心臓、下りの膝』とはよく言われますが、帰りはやっぱり膝にくる。ちょっとした転倒が大きな滑落になることもあります」

また、無謀なコース取りが、リスクを高めてしまうこともあります。「かつては登山道で、今は通行止めになっている『大ダワ林道』というコースがあるんですが、沢沿いについている登山道でとにかく崩れやすい。通行止めと書いてあっても通れないわけではないので、そこを無理やり突破して滑落する」というケースもありました。登山道は、土砂崩れなどで通行止めになることもあります。最新情報をビジャーセンターなどで収集して、登山計画をたててほしいですね」

登山前

日頃の体力づくり

無理なく登れるよう、普段から体力づくりを。そして、体力に見合った登山計画を。

単独よりも複数で登る計画を

単独登山はリスクが高いため、できれば、複数での登山計画を。ただ、グループ登山の場合でも、リーダーや他人任せにせず、登山計画を自分で把握しておくことが大事。

山の最新情報をチェック

奥多摩ビジャーセンターでは、登山道の通行止めにまつわる最新情報をHP上に掲載。事前にチェックを。

登山計画書の提出を

かつては登山ボストへ投函するのが一般的だったが、今はオンラインが便利。おすすめは、警視庁でも推奨しているスマホアプリ「コンパス」。警察・自治体とも連携しており、下山通知がなかった場合、確認メールが届く。

山岳保険に加入を

日帰り登山から加入できる保険、ヘリ捜索サービス付きで発信機を貸してくれる保険など、昨今の山岳保険は充実している。埼玉県の防災ヘリは有料化されており、雲取山の一部は対象山域にあたる。万が一のことを考え、加入しておくと安心。

緊急時

迷ったら元の道を引き返す

今いる場所がわからなくなるても、自分が通ってきた道が安全なのは確か。そのため、引き返すのが得策。人間の心理として下山したくなるが、理性に下る危険。特に奥多摩の山々は、降りれば降りるほど急峻になつたり、最後が崖や滝になっていたりなど、リスクが高い。雲取山の場合、なるべく高い場所に行った方が携帯電話が繋がるチャンスも高く、尾根上にあがれば空からも見つけやすくなる。なお、夜間は無理せず、その場で待機を。

SOSは110番、119番でもOK

警察も救急も互いに連携しているのでどちらでもOK。ただ、怪我や病気なら119番へ。専門的な知識を持つ消防隊員が電話口で応急処置などのレクチャーをしてくれることも。



PROFILE

佐藤佑紀さん

元・警視庁青梅警察署山岳救助隊。奥多摩エリアの山岳救助活動に15年間、従事。現在は、小金井警察署勤務(2022年9月時点)。プライベートでは一年を通じて様々なスタイルの登山をする傍ら、山岳遭難搜索のボランティア活動をしている。

登山中

スマホは機内モードに

携帯電話は常に電波をサーチし、使用時以外も電池を消費している。バッテリーの節約のために、機内モードにしておくこと。なお、機内モードでもGPSは作動する。

時間管理を徹底

なるべく早く出で、なるべく早く下ること。足を挫いただけで、歩く速度は半分以下になる。余裕を持った行動を心がけ、場合によっては“回れ右”的判断を。

飲酒は行動終了後に

乾杯は、山頂ではなく、下山後、あるいは山小屋に着いてから。その日、まだ歩く予定があるのでアルコール摂取は我慢したい。

持ち物

カッパ

山の天気は急変する。防寒着にもり、両手が使えるカッパは、晴れいても必須。

ヘッドライト

日帰りの計画でも必須。たとえば、足を挫いてしまい、ストーブになってしまった場合でも、ヘッドライトさえあれば、下山できることも。2000m以下の樹林帯が続く雲取山では、日没よりも早く暗くなる。バッテリーのチェックは忘れずに。

予備の食糧と飲み物

いざという時のため。佐藤さんの場合は、ペットボトルの水かスポーツドリンク、高カロリーのゼリー飲料かチョコバーを必ず持参。

携帯電話

通信手段として必須。スマホならGPSアプリを入れておくと便利。ただし、使い方を事前に確認しておくこと。また、予備バッテリーの準備も忘れない。

紙地図

GPSアプリも万能ではない。1/50,000以上の紙地図と合わせて持つと安心。

ライター or マッチ

国立公園内は、火気厳禁。しかし、山の夜は冷え込むため、もし遭難してビバークすることになったら、暖をとる必要がある。万が一のために、火を焚く道具を持っておくと安心。

目立つ服装

四季を通じ、山の中で目立つのは青色。遠くから認識しやすい服装を。

熊よけ&虫除けアイテム

遭難やビバークの時は、熊との遭遇リスクが高まる。熊鈴やラジオなど音が出るものを持参を。また、虫対策には、虫よけウェアなども有効。蜂に攻撃されやすい黒色を避けるなどの工夫も。

くもとり、いま、むかし。

50年前、山を彩った植物ファイル

Once Upon A Time

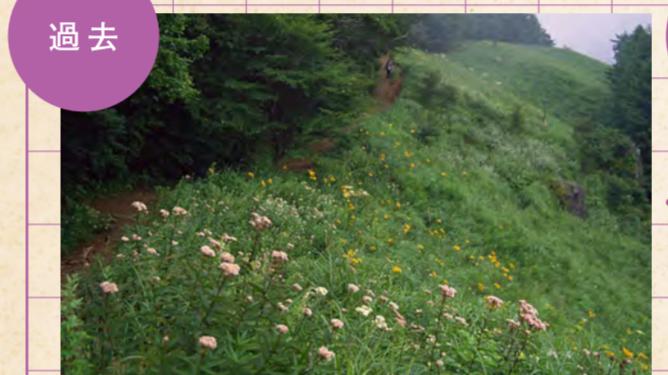
昔から雲取山を知る人々にとって、現在の山の環境は大きく違つて見える。

かつては「お花畠」と称されたこの山が、どのように、なぜ、

大きく変化してしまったのかについて、

50年以上も雲取山を見つめ続ける人物とともに考察していく。

過去



現在



現在



95年頃を境目に激変した、雲取山の植生

奥多摩に生まれ、古くから自然を見ながらの山登りを好んでいた堀口行雄さん。50年以上も前から雲取山へ通い、写真を撮影し続けている。そんな堀口さんは昨今の雲取についてこう話す。

「雲取に登つて、目の前に広がる風景(花景)が変わったかと聞かれれば、非常に大きくなつたと言わざるを得ません。昔の雲取山はお花畠と呼ばれては、多様な花が見られたんです。2017mもある雲取ならではの高山植物も多彩で、高い山でしか見られない花を見るのも雲取の楽しみでした。そのような環境が段々と変化していき、2000年代に入つ頃には風景が全く違つたものになつてしましました。植物の種類がどんどん減少し、植物相は单纯化の方向へ向かっているのです」

堀口さんによれば環境が目に見て激変したのは95年頃。お花畠の異名をとつた雲取の風景は急激に様変わりしてしまったという。

気候変動などの影響がある可能性も否めないが、最大の理由は鹿の増加だ。鹿が片っ端から植物を食べてしまうのである。

「ヤナギランとかオオバキボウシ、ウスユキソウなど、どんどん消えていきましたし、以前はスズタケなどが繁茂して笹の間を漕ぐように進むなんてこともありました。背の低い植物は大方、鹿が食べてしまつ

ています」

たとえばラン科の花は愛好家の間で人気だが、中でも特に注目されるアツモリソウは現在、奥多摩で見かけるのは難しい。だが、かつては普通に雲取で鑑賞できたそうだ。

「今はありませんが、標高1750m地点に以前あった奥多摩小屋のすぐ前の防火帯は美しいお花畠でした。80年代半ば頃まではあのエリアにアツモリソウがたくさん育つていて、バッと見ただけでアツモリソウが50本ほど咲き誇っている風景が当たり前だったんですね」

堀口さんによれば環境が目に見て激変したのは95年頃。お花畠の異名をとつた雲取の風景は急激に様変わりしてしまったという。

「やはりこれだけ高度のある山だから、貴重な植物を観察する価値はおおいにある。雲取に行われる際は、植物は危機に瀕しているという事実を頭において、自然にインパクトを与えないことを心がけていただきたいですね」

かつての雲取山で彩った植物や生物たち

ここに挙げた美しい花々を今では雲取山で見ることできない。かつてはこうした色彩が山全体を覆っていたのだ。



ウスユキソウ



アツモリソウ



シモツケ



ヒメスマレサイシン



ミヤマスマレ



ヤナギラン

PROFILE

堀口行雄さん

奥多摩に生まれ育ち、役場に務めていた期間には教育委員会主催の雲取山登山教室でガイドするなど、奥多摩の自然に深く精通する。氏が運営するウェブサイト「奥多摩の山と自然」では、撮影した膨大な写真を紹介している。

about NATIONAL PARK

その全域が秩父多摩甲斐国立公園に属している雲取山。
貴重な自然を有する国立公園に関連したトピックをご紹介。

NEWS & TOPICS

NEWS & TOPICS

1

切り絵作家・後藤郁子さん作 国立公園オリジナルグッズ



登山と自然をこよなく愛し、作品を精力的に発表している切り絵作家・後藤郁子さん。多摩地域出身の後藤さんが登山を始めたのは、30代後半のとき。気まなソロ登山に魅了され、奥秩父にある甲武信小屋での勤務経験などを経て、作家として活動を始めたというユニークな経歴の持ち主だ。そんな後藤さんにとって、雲取山は思い入れの深い山のひとつだとい。

「奥多摩や高尾周辺の山々の次にちょっと頑張ってを目指したのが雲取山でした。たくさんルートがあってどの道も雰囲気が違うので、季節を変えてあちこち歩きました。どの季節に行っても毎回新しい発見があるのがおもしろい。奥秩父縦走路もワクワクします。『→金峰山』の標識を見て、「尾根は全部繋がっているんだ」と分かってびっくりしたのも雲取山です」

奥多摩奥秩父をテーマにした作品を手掛けてきた後藤さん。そのひとつが、秩父多摩甲斐国立公園オリジナルグッズのデザインだ。日常使いできるトートバッグとサコッシュは、奥多摩ビジャーセンター、山のふるさと村ビジャーセンター、御岳ビジャーセンターにて好評販売中。デザインに込めた想いについて聞いてみた。

「国立公園もテーマですが、自然を保護するという人間主導ではなく、隣にいつもある自然と共生するようなイメージの絵にこだわったと思います。自然は人の外側にあるものだけど、頭の中にも存在します。人が行かなくなても山はいつもそこにあるけれど、人が想うことで山がそこに存在する。そんな入れ子構造のような絵にしました」

サコッシュには、奥多摩奥秩父を代表する生き物として、ニホンカモシカをモチーフに独特の世界感を紡いだ。

「動物は森の中にいるけれど、動物の中にも森があるというようなイメージです。黒々とした奥秩父の森が、遠くから見たら動物の毛並みみたいだ…と思ったのがヒントになりました」

山のこと、自然のこと、ひいては、自然と人の関係に興味があるという後藤さん。自らの歩みとともに進化する独創的な視点から、今後、どんな作品を生み出していくのか楽しみだ。



七ツ石山小屋のオリジナル手ぬぐいも後藤さん作。2020年の発売以降、山小屋の人気土産に。

NEWS & TOPICS

2

奥多摩まちづくり事業マナーアップ啓蒙活動実施中



奥多摩町 企画財政課 企画調整係
0428-83-2360

雲取山を含む、秩父多摩甲斐国立公園。奥多摩町もその全域が国立公園に含まれる自然豊かな人里だ。コロナ禍をひとつのきっかけに、近年、BBQやキャンプを楽しむ町外からの観光客が増加する一方で、ゴミ投棄、騒音、火気の使用など、さまざまなマナー違反行動が顕在化。有志の町民の間では、クリーンアップ活動や現場での声かけなど、問題解決に向けた多様なアクションが自発的に生まれるなか、まちづくり事業を推進する官民協働の「奥多摩町まちづくり委員会」では、オリジナルポスターを使ったマナーアップ啓発事業を推進。「#KEEP BLUE+GREEN National Park 考えて、守ろう。緑と青の国立公園」をキャッチコピーに、この場所が国立公園であることを全面的にPRする12種類のポスターを制作し、各所に掲示をスタート。国立公園であることを認識することで、貴重な自然のなかにおける、自身の立ち振る舞い(行動)を見つめ直すきっかけになれば、という思いを込めた。耐水性が高く、車にも貼れるステッカーも同時に作成。ポスターのデータは奥多摩町HP上で自由にダウンロードできるほか、希望者には、ポスター、ステッカーの配布を継続中だ。

Edit & Text & Photo: Yukiko Soda [miguel] Piroshi Utsunomiya [miguel] Art direction: Atsushi Kodani Illustration: Toshiyuki Hirano
発行:東京都奥多摩町 https://www.town.okutama.tokyo.jp 編集&制作:株式会社ミゲル 〒198-0101 東京都西多摩郡奥多摩町大丹波640 miguel@dg8.so-net.ne.jp http://www.miguel-web.info
2022年9月発行 本誌は奥多摩町内の各観光施設、JR青梅線各駅構内、都内協力店などで配布しています。店頭などで無料配布にご協力いただける施設を募集中です。ぜひお問い合わせください
Cover story: 東京最高峰の雲取山。山深くにあるその頂は、登山者しか望むことができない



都心から約1時間半、東京最西端に位置する奥多摩町。近年、自然豊かなこの町に、移り住む人が増加中だ。自分らしい生き方を謳歌する移住者へのミニ・インタビュー。

File 09

原田有佳里さん・川上健さん



JR古里駅から徒歩5分のところにある見晴らしのいい一軒家。そこに、原田有佳里さんがパートナーの川上健さんとともに移住したのは2021年6月のこと。荻窪で同棲していた2人は、コロナ禍をきっかけに完全リモートワーク化。よりよい住環境を求めて、自然豊かな郊外へと移住を検討するようになった。そんななか、テレビ番組の奥多摩特集を見て魅力を感じ、物件を探すこと。空き家バンクで見つけすぐに内見を申し込み、ひと目で気に入ったというのが今の住まいだ。「日当たりが良く、駅にもコンビニにも近いので理想的でした。荻窪ではアパート住まいだったので、立派なマツノキが育っている庭にも惹かれましたね」と原田さん。築約40年の中古物件を理想的な住まいにするべく、リフォームを前提に購入。改築・購入費用の一部として、移住・定住応援補助金が支給された。1階の和室と台所は壁を取り払い、広々としたダイニングキッチンにリノベーション。障子や壁などDIYでも改修を進め、モダンな空間に仕上げた。「移住してライフスタイルががらりと変わった。家庭菜園、キャンプ、釣りなど奥多摩に来てから趣味が増え、毎日が楽しい。いずれはカフェ経営やイベントも企画したいと考えています」。

移住・定住応援補助金とは?

定住を目的として住宅の新築、増築または購入をした方に対して、補助金の交付や金融機関などからの資金借入に対する利子を補助する奥多摩町の補助金制度。事業費10万円以上で、上限220万円(現金200万円、商品券20万円)の補助金が支給される。利子補助限度額は、33万円(最大年額)。年齢など諸条件あり。



天井を抜き、元の梁を活かした



アプリで改築をシミュレーション



使い勝手のいいアイランドキッチン

Welcome to OKUTAMA TOWN

東京の森林へ移住定住のススメ

都下での生活と自然豊かな環境を両立する奥多摩町では、移住・定住者を迎えるために、さまざまな支援を行なっている。住宅支援や子育て支援制度も充実しており、ファミリー世帯にも暮らしやすい町だ。

移住・定住応援補助金

奥多摩町では、次代を担う若者等の定住を応援するため、定住を目的として住宅の購入・リフォーム等をした方に対して、事業費10万円以上で、事業費の1/2以内、最大200万円の補助金を交付します。事業補助金の限度額200万円を超えて、次の条件に当てはまる場合は、町内で使える各自10万円ずつの商品券を上乗せして補給します。

- 1)奥多摩町内に所在する事業所等に事業を依頼した場合
 - 2)壁、床等に地場木材(多摩産材)を10m以上使用した場合
- ◎年齢条件 以下の方を対象にしています。

- 45歳以下の夫婦
- 18歳以下の子どもを持つ世帯
- 35歳以下の方

その他

いかにも暮らしやすい町をめざし、町独自で15項目の子育て支援事業を行っています。入園・入学、進学等の支援や、保育料はじめとした学校給食費、中学制服代、高校生通学定期代など、子育てを頑張っている方への負担を軽減するための助成があります。また、都の制度を拡充し、所得基準を超えた世帯にも医療費を全額助成します。

お問い合わせ: 奥多摩町定住応援総合窓口 Tel.0428 83 2310 https://www.town.okutama.tokyo.jp

暮らす 奥多摩町に

自然がいちらん濃い TOKYO

